

〈Interview〉 Interview with Akiko Yamakawa (1)  
: About Spirituality in Translated Literature

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 正雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1447">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1447</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## インタビュー

### 山川亜希子氏へのインタビュー（1）

— 翻訳文学の霊性をめぐって —

#### Interview with Akiko Yamakawa (1)

About Spirituality in Translated Literature

○質問 三浦正雄

MIURA, Masao

☆回答 山川亜希子氏

YAMAKAWA, Akiko

☆ では、インタビューどうぞよろしくお願ひ致します。

○ こちらこそよろしくお願ひ致します。質問を事前にお送りしたのですが、テーマが文学と霊性ということもあって、前半の一般的な質問も重要なのですが、後半の作者と作品についての質問が中心となります。

お時間も短いので、簡潔に進めたいと思います。最初の質問ですが、

Q①翻訳家になろうと思われたきっかけは何ですか？というものです。

前に何か本で拝見したとは思いますが。

☆ では、簡単にお話しいたします。

夫<sup>1)</sup>も私も翻訳者になるなんて思ってもいませんでした。1982年頃に気づきのセミナーというのに参加して、自分は何者かということを探求し始めたんですね。その後すぐにワシントンDCに夫が転勤になり、そこでも自己探求を続けました。

1984年ごろにシャーリー・マクレーン<sup>2)</sup>の本が出まして、それを読みまして、夫が日本語に訳

してみんなに読んでほしい本だと言い出しました。調べたところ、日本語にはなっていないし、出版社があれば私たちが翻訳できるということもわかったのです。

あつという間に、出版してくれる地湧社というところが見つかりまして、アメリカですぐに2人で翻訳しました。それでも、その1冊を趣味として翻訳するだけだというつもりでした。でも、そこに神様の介入があって、「あなたたちは人々の意識を覚醒させるために働きなさい。」という呼びかけがありました。その後、シャーリーの本を次々に訳していきますし、私たちが「自分の仕事は役人ではなくて、人々の意識を覚醒させるということなんだ。」という自覚があって、それからの15年は翻訳一筋でやってまいりました。

○ 次に、事前にお送りした質問に

Q②絃矢先生と亜希子先生は、翻訳のお仕事をどのように分担されているのですかとあります。

☆ 『アウトオンアリム』<sup>3)</sup>の翻訳は、前半後半で分けました。主人が前半、私が後半を受け持っ

キーワード：山川亜希子、霊性、翻訳文学

Key words : Yamakawa akiko, spirituality, translated literary works

おります。

そのあとは、主人が10年近く病気をしております、その間は大体私が翻訳をして、あとがきを主人が書くという形でやっておりました。

主人が元気になった1995年くらいからはまた半分ずつという感じで、今に至っております。

○ 次の質問です。

**Q③** シャーリーマクレーン『アウト・オン・ア・リム』翻訳に至る経緯と大ベストセラー後のご心境についてのお尋ねです。

☆ 出版のいきさつというのは、自分が覚醒した時に会って、この本を日本語に訳したいと思って、うまくいったということです。

それ以降は、すぐに売れたわけではなかったけれど、全国的な反響は最初からあり、沢山お手紙をいただきました。本当に細々とした反響でしたけれど。また、朝日新聞なども取り上げてくれました。本屋さんもお金がないし、私たちもお金がないので私たちも協力して、やっと広告を一回出すという状況でしたが、少しずつ売れていきました。

2年ぐらいたってから、ソニーが、『アウト・オン・ア・リム』<sup>4)</sup>のビデオを発売することになり、雑誌に大規模な広告を打ってくれて、それから急に爆発的に売れるようになりました。5年ぐらいたった時には、私たちはシャーリーの本を5冊くらい翻訳していたのですが、そのうち4冊が同時にベストセラーになったりしました。

私たちは、ある意味で神様を信じていて、神様がやれと言われたことをやって来たので、あまり意外とも思わずに、自分たちのやるべき仕事に邁進してきたという感じですね。

○ 自然の流れでそうなったということですね。

☆ そうですね。自然の流れですね、本当に。

○ 次の質問です。

**Q④** 文学とそれ以外の分野で、翻訳されるときに大

きく異なる点は何でしょうか。

☆ 基本的には、私たちは、精神世界の本ばかりで、文学の翻訳はあまりやっていないと言った方が良いでしょう。傾向としては理論的な話よりは『聖なる予言』<sup>5)</sup>やシャーリーの本のように物語性のある文学を翻訳した時に本当の喜びを感じます。そういう作品に対しては、私の場合には、情景がほとんど目に浮かんでいて、それを日本語にしてゆくというイメージがあります。

○ 『聖なる予言』は、本当に素晴らしい作品だと思います。今だに感動が薄れておりません。

☆ ありがとうございます。

○ 文学の優れた点（抒情性、物語性のおもしろさ）と精神世界系の本の素晴らしいところ（霊性）の両面を持つ作品というのは、非常に少ないもののように感じております。

☆ やはり物語性があると読みやすいし、皆さんが自分のこととして読んでくださるので、とてもインパクトが大きいのではないかと思います。

○ ありがとうございます。

**Q⑤** 海外の作家で、最も好きな作家は、どなたですか？

☆ 私たちが、一番親しいのは、パウロ・コエリヨ<sup>6)</sup>です。『アルケミスト』<sup>7)</sup>のパウロ・コエリヨです。シャーリーにも会ったことはありますが、やはり彼女は大女優なので、住む世界が違う感じがします。それから、ジェームズ・レッドフィールドとも会ったことがあって、とても良い人だなあと思ったこともあります。あと、会ったことがあるのは、ブライアン・ワイズさん<sup>8)</sup>—あの『前世療法』<sup>9)</sup>のブライアンワイズさん—この方も本当に素晴らしい人間的な、ヒーラーとしては世界最高のお一人だと思いました。大変尊敬しています。これらの作家さん、同じくらい

好きです。

- 日本でも、江戸期までは文学はかなり幅広く、すべての分野を包含する概念だったようですが、近代化によりいわゆる文学だけの文学というジャンルが成立し、文学でないものをジャンルから排除してしまい、現在の狭い文学というジャンルができました。危機混迷の現代の状況から生という問題を考えれば、こうしたジャンル分け自体に興味がないようにも思われます。そうはいうものの、こうした質問をする際の便宜上、現在のカテゴリーに基づいて文学と称していることをお許しください。

Q⑥もしいらっしゃったらということで、日本の作家で最も好きな作家は誰ですか？

☆ 誰が好きかな？今、急に言われても…。最近の新しい作家…三浦しおんさんなんか好きです。読んで面白いなあと。古い人は？……あまり読書家でもないの。

○ Q⑦文学と霊性（スピリチュアリティ）との関係は、どのような点にあると思われますか？

☆ 文学にしても音楽にしても何にしても、その一番大切な役割というのが、スピリチュアリティというか、この宇宙の真実というか私たちは何者かということとどこかで伝えるというのが役割だと思うんですね。そういう意味では、全ての芸術というのは同じ役割を持っています。その中で文学は、言葉を通じて、またはイメージーションを通じて伝えるという大事な役割を持っている、と思います。

文学の中でも、人間とは何者なのかということに全然興味もなくて、それでも何か美しさとか素晴らしい波動を伝えるものもあると思うし、逆に暴力とかいうものもあるので、あまり私は、ジャンル分けというのが好きではないです。音楽の素晴らしいものはスピリチュアルですし、文学も本当に良い文学はものすごくスピリチュアルなものだと思います。

○ 文学史を見ますと、日本の場合ちょっと特殊で、西洋ではスピリチュアルな文学は多くありますから。

☆ でも、それも、カテゴライズしてるだけなんですよね。

注)

- 1) 山川紘矢…1941年一。翻訳家・著作家。妻の亜希子と共に官僚を経て翻訳家となる。
- 2) シャーリー・マクレーン…1934年一。アメリカの女優。アカデミー主演女優賞を受賞。後年、自らの体験から出発して、神秘主義に傾倒し、ニューエイジの旗手となる。
- 3) 『アウト・オン・ア・リム』(書籍)…シャーリー・マクレーン著、1984年刊。翻訳版は山川紘矢・亜希子訳、地湧社、1986年刊。神秘体験をへて覚醒していったシャーリーの自伝のエッセイ。世界的ベストセラー。
- 4) 『アウト・オン・ア・リム』(映画)…ロバート・バトラ監督。シャーリー・マクレーン、チャールズ・ダンス主演、1989年。前項の映画化作品。
- 5) 『聖なる予言』…ロバート・レッドフィールド作の小説。1993年刊。翻訳版は山川紘矢・亜希子訳、角川書店、1996年刊。人間の精神的・霊的な進化を、冒険小説の形で表現した作品。世界的ベストセラー。
- 6) パウロ・コエリョ…1947年一。ブラジルの作家・作詞家。世界を巡る旅から様々な作品を描き、第2作『アルケミスト』は、ベストセラーとなり、各国で翻訳された。アンデルセン文学賞を受賞。
- 7) 『アルケミスト』…1988年。ブラジルでベストセラーとなった後、アメリカでも刊行され世界的なベストセラーとなった。幻想的な雰囲気、夢を追う少年の姿が描かれ、その中に真理が投影されている。
- 8) プライアン・ワイズ…1944年一。アメリカの精神科医。催眠療法による退行を研究しているうちに、死後の生存を確信するようになったという。
- 9) 『前世療法』…1988年。翻訳版は、山川紘矢・亜希子訳、PHP研究所、1988年。プライアン・ワイズの行った退行療法により、前世の記憶がよみがえり、それによって現在の病気が治癒した例を豊富に取り上げながら書かれている。

注記）本稿は、2021年9月10日（金）に、ZOOMアプリにより翻訳家山川亜希子氏と三浦の自宅を結んでインタビューを行った。動画から作成したメモを活字に起こし、読みやすい形にするため若干の編集を加えたものである。